

早稲田大学 社会科学部 数学科 傾向と対策

1. 過去の受験者平均点と最低点

数学科	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年	2025 年	2026 年
共通平均点						96.555/120	94.647/120
英語平均点	22.191/50	19.404/50	24.159/50	20.930/50	21.834/50	32.535/60	32.787/60
数学科平均点	11.670/40	18.311/40	11.753/40	15.472/40	24.525/40	24.235/60	19.239/60
合格最低点	91.36/130	78.62/130	89.451/130	78.92/130	84.219/130	174/240	164.4/240

2. 配点

共通 120 点（国語 40 点 外国語 40 点 選択科目 40 点）英語 60 点 数学 60 点

3. 特筆すべき出題範囲について

★数学 A の出題範囲は全てとなっています。

★数学 B では「統計的な推測」も出題範囲に含まれています。

4. 学習について

60 分で 3 つの大問を解きます。記述式です。以前は社会受験がありましたが、2025 年から変わりました。以前は得点調整がありましたが、現在では共通の選択科目のみで行われているようです。数学はそこまで難しいわけではないのですが、時間がないのが特徴です。まずは全て解くというよりは、できそうな問題をきっちりとして効率よく得点を稼いでいくようにしましょう。

また頻出分野が少ないのも特徴です。微積分すら出ない年も何度かあります。整数や複素数と方程式といった受験生があまり学習しない分野も出題されています。幅広く学習をしていく必要があります。その中で参考書の例題にあるような問題を本番でききりとれば受験者平均点を越えることは可能です。基本問題の定着を優先しましょう。

参考書ルートとしては次のような流れになるでしょうか。

①『青チャート』（レベル 4 まで）『Focus Gold』（レベル 3 まで）『LEGEND』（レベル 3 まで）『数学Ⅰ・A 基礎問題精講』『数学Ⅱ・B+ベクトル基礎問題精講』『Super QuickⅠ+A』『Super QuickⅡ・B・C（ベクトル）』といった網羅系参考書をこなしましょう。例題が解けるようになることが目標です。数学が苦手である生徒さんに対しては『Super Quick』をおすすめします。

時間のない受験生は『Super Quick』→『文系の数学 重要事項完全習得編』と学習するとよいでしょう。

②『大学への数学スタンダード演習』『文系の数学 実践力向上編』『理系数学の良問プラチカ 数学ⅠAⅡBC』といった問題集で演習を積むとよいでしょう。

③過去問演習で時間内に得点を稼ぐ練習をしましょう。時間は足りないと思います。限られた時間で自分の力を最大限発揮する練習は必要です。解けそうな問題からきっちり片づけ、難しい問題はあとにして部分点を稼ぐというスタイルになるでしょう。第一志望であれば 10 年分くらい取り組んでおきたいです。

5. 過去の出題問題と難易度

過去に出題された分野と難易度を以下に示します。

A・・・完答必須です B・・・合格の明暗を分けそうです C・・・方針をとらえて部分点を得たいです

D・・・難しいです。少しでも部分点がとれたら。 E・・・できなくても仕ないです

2019 年 目標 6 割

1 図形と方程式 BC

(2)までは平易なので解ききりたいです。(3)もとりあえず連立だけでもしたいですが、多くの受験生はできなかったでしょう。

2 2 次関数・積分 A

すべて基本的な計算です。完答必須でしょう。

3 確率 B

(2)が勝負ですが、設定がやや斬新です。できなかった受験生は多いと思われます。

総評

この年の受験者平均は 20.774 点/40 点でそこそこ高いです。そこまで簡単というわけではないのでレベルの高い受験生が多かった可能性があります。1 で(2)まで、2 が全て、3 が(1)までできればとりあえず平均点でしょうか。

2020 年 目標 4 割

1 微分 B

(3)までとれるのが理想です。(2)が良いヒントで、使えれば計算早くなります。計算力が勝負でしょう。

2 数列 C

(2)まで解きたいです。(1)で x に騙されて Σ 計算できない受験生も多そうです。(2)も抽象度は高いですが場合分けを 4 通り行えばよいです。

3 図形の性質 C

五輪だ！と感動している余裕はありません。記述もやりづらくうまくこなせなかった受験生が多そうです。(1)ができたらいいでしょう。

総評

この年の受験者平均は悲惨で 11.670 点/40 点です。1 で(3)まで、2 で(2)まで、3 で(1)までがとれたら十分合格点でしょう。

2021 年 目標 5 割

1 2 次関数・積分 AB

一見、形が難しそうですが、定石通り計算していけば平易です。(2)で範囲を出せない人は多いでしょうがその他はできてほしいです。

2 平面ベクトル B

(3)で範囲を定められない人は多そうです。それ以外はきっちりとりたいです。

3 整数 BC

まずは位取り法で十進法表記にして割り算を実行していけばよいです。(2)で余りが「-3」とできてきて、うまく 0 以上 k 以下の数に調整できたかどうかでしょうか。(2)まではとってほしいです。

総評

この年の受験者平均は 18.311 点/40 点でした。1 を(2)で減点される程度でとどめ、あとは(2)までできれば及第点といったところでしょう。

2022 年 目標 4 割

1 確率 BC

文字が多くて抽象的に見えますが、条件付き確率の公式の運用と場合分けを丁寧に行えばよいです。類題の経験があればこなせるはずで差がついたでしょう。(3)までできてほしいです。

2 図形の性質・微分 BC

序盤は、円と接線の性質を用いて、図に情報を書き込み、相似を用いて長さを導出します。三角比で習う公式等を用いてしまう人が多そうで、案外差がつきそうです。完答が理想ですが、時間内には厳しいでしょうか。

3 整式の剰余 B

整式の剰余としては定番問題で、テキストや問題集で経験はあるはずです。ただし、受験生はあまり学習しないところではあるので、差がついたでしょう。完答して周りに差をつけたいです。

総評

この年の受験者平均は 11.753/40 点で、衝撃的な低さでした。3 問とも(2)までとれば一気に差をつけられます。

2023 年 目標 5 割

1 微積 BC

何度も 6 分の 1 公式を用いる問題です。文字が多いので注意しながら解いていきます。(3)までできてほしいです。

2 数と式、整数の性質 B

(2)までは「積の形を作る」という整数の基本です。(3)は「不等式で範囲を絞る」という整数の基本でした。文字は多いもののここは差がつきそうです。完答を目指したい問題です。

3 複素数と方程式 BC

(2)までは類題の経験があれば簡単です。愛知教育大、名古屋大、東北大で類題があり問題集で触れていた人もいたのではないのでしょうか。(2)までできてほしいです。

総評

この年の受験者平均は 15.472/40 点でした。完答は目指さず、できるところ、コスパの良いところをどんどん解いていくのがよいでしょう。1 は(3)まで、2 3 でそれぞれ(2)までが理想です。おそらく 3 の出来は悪いので 2 で完答を目指すという受験生も多かったと思われます。

2024 年 目標 6 割 5 分

1 図形と方程式 B

線形計画法としては定番でしょう。(3)まではスムーズに確保したいです。(4)は傾きで場合分けを要します。(2)(3)がそのヒントとなっていました。3 が難しい分、ここに尽力したいです。可否を分けた可能性があります。

2 ベクトル AB

角の二等分線の性質から内心の位置ベクトルを求める経験はあったでしょうか。後半は垂心が変わっていますが、誘導が丁寧であり完答必須といえるでしょう。

3 数列 C

(1)もこなせない受験生は多そうです。 $a_i - a_1 = a_i - k = a_{i-1}$ になるしかないよねということに気づいて論証します。ここができれば(2)はついてきて大きな得点源となります。とはいえ、出来は悪いでしょう。

総評

この年の受験者平均は 24.525/40 点で例年より高かったです。1 2 がいつもより解きやすかったのが影響しているでしょう。3 を捨てて 1 2 に尽力するだけで平均点は超えそうです。

2025 年 目標 5 割

1 整数 BC

題意をとらえて、シラミ潰しに論証するという問題です。(2)まではとりたいです。最後は(2)を hint にして結局 n^4 の 1 の位を調べればよいよねということですが、できない受験生がほとんどでしょう。

2 数列 B

階差数列、和の基本的問題で、完答を目指したいです。ただ(3)で $n = 1$ のときだけ階差数列の定義が分かれていますので、公式をそのまま運用はできません。第二項を初項にして求めるイメージです。階差数列の原理が分かっているれば難しくはありませんでした。

3 三角関数 BC

(2)まではしっかりとりたいです。(3)はかなり厳しいでしょう。

総評

この年の受験者平均は 18.311/40 点で例年通りの難易度でした。近年は解きやすい問題が見受けられます。とるべきところと捨てるところを見極めて取り組むべきでしょう。

2026 年 目標 5 割

1 図形と方程式 BC

(1)で図を描くのに時間がかかったでしょう。場合分けをして絶対値を外し、グラフを描いていきます。(2)では線形計画法です。大半の受験生は(3)まで考える時間はなかったでしょう。(2)まできっちりとりたいです。

2 確率 C

(1)の出来は悪そうです。 $y > z$ となる組の総数と $y < z$ となる組の総数が等しいことを利用するのがよいですが、まずこの発想が出てこない受験生は結構いるでしょう。 $y = z$ となる組の総数を数えるにも偶奇の場合分けが出てきます。ここをしっかりと対応できた受験生は少なそうです。(2)は定番です。(3)は 1 回目に 2 が出るときと 3 回目以降で 2 が出るときで場合分けをします。3 回目以降で 2 が出る確率は求める確率を p とおいて $\left(\frac{1}{2}\right)^2 p$ とかけます。漸化式的な発想ですが、文系の受験生には難しいでしょう。(2)だけであればよいでしょう。

3 整数 B

不定方程式の定番問題でしょう。係数が大きいときの対処をしたことがあれば全体的に容易です。完答したい問題です。

総評

1 (1)(2)、2 (2)、3 完答で合格者平均を越えていけるでしょう。2 では差がつかなかったと思われます。